友だちとのかかわりを通して，作りたいものを表現し，実践に活かしていく子ども

－５年『針と糸の名人になって，自分だけのオリジナル小物を作ろう』の実践から －

１．題材の構想

家庭科では，実践的・体験的な活動を通して，基礎的・基本的な知識及び技能を活用して，生活の中の課題について，解決するために生活をよりよくしようと工夫する能力と進んで実践しようとする態度を育てることを大切にしている。

製作の学習においても，基礎的・基本的な知識及び技能を活用して，作りたいものを思考し計画のワークシートやできあがりの作品に表現することで，よりよい生活につながり家庭で実践しようとする態度が育まれるだろうと考える。本題材では，生活に役立つものの製作について，製作計画を立てたり作品をよりよいものにしていこうと考えたりすることで，思考力・判断力・表現力を育成したいと考える。

本題材では，思考力・判断力・表現力を育成するために，作品の個人評価へのアドバイスや相互評価をする子どもどうしのかかわり合いを大切にしながら展開していく。具体的には，計画の段階において，一人ひとりが作りたいものの手順や完成図を表現し，もっとよくしようという視点をもってアドバイスをしあったり互いの作品のよさを認め合ったりすることで，個人での製作の活動ではあるが，友だちとかかわり合うことで思考の幅を広げ，よりよい作品を作ろうとする意欲が高まっていくと考える。

小学校５年生にとって，初めての家庭科は興味・関心は強く，特に実習を行うことを楽しみにしている。本学級の子どもたちは，針と糸を使って何か作ったことのある子どもより一度も使ったことがない子どもの方が多かったが，初めてもらえる裁縫道具にとても喜び，「早く使いたい」，「早く縫いたい」という声が聞こえてきた。年度当初に行ったアンケートでも家庭科でやってみたいことは「裁縫」とほぼ全員が答えた。すでに経験のある子どもも初めての子どももとても意欲的な姿がみられると予想する。

一方で，家庭科は，生活している場が学習の場であるが，家族構成や生活の多様化などにより，便利なものが増え，「ぞうきんは買ってくる」などという子どももおり，自分で作るという製作活動が減少しつつある。子どもによって生活経験や技能の差が大きく，多くの実践的・体験的活動を取り入れることが必要である。また，基礎的・基本的な技能を身につけた上で，それを活用して物を製作するときに，どういうものを作るとか，どういう手順で作るとか自分で考えるとなると，その経験がないため，どうしていいかわからなくなる子どももいることが予想される。そのために，練習布からネームプレート，小物作りへと段階を追って経験を増やしていきたい。生活をよりよくするために自ら課題を見つけ，課題解決することは，子どもたちに物を製作する楽しさを味わい，これから家庭の中で活かしたり，縫い方に関する基礎的・基本的な知識および技能を身につけたりする上でも有意義であると考える。

このような子どもたちの実態を踏まえて，本題材では，製作に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身につけ，定着させるとともに，これらを活用して，目的に合わせて工夫した作品を製作し，家庭でも実践しようとする態度を育てることをねらいとする。

このようなねらいを達成するために，まずは基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着を図らなければならない。本題材は，基礎・基本の技能から布を用いた簡単な衣服の製作まで段階的に身につけていく内容であり，その導入の部分となる。そこで，最初に練習布を用いて，布を用いて物を製作する上で必要な基礎・基本の技能を習得できるように練習する。小物作りは，どのような形や機能をもつものにするかなどを具体的に構想し，目的にあっているか，使って便利であるか，好みの外観であるかなどを考えて工夫できる教材であると考える。また，自分だけの小物づくりとすることで意欲的に取り組めると考える。最初の製作学習の中で，基礎的・基本的な知識及び技能の定着を確かなものにし，生活に役立つ物を布を用いて製作することを通して，一人ひとりが目的をもって工夫して物を作りあげていく達成感を味わわせたい。時間をかけて作ったものは，子どもにとって，作る楽しさ，使えるうれしさばかりでなく，家族に喜ばれたりほめられたりすることで，製作意欲や自信につながっていくものである。

それに加えて，子どもどうしのかかわり合いを大切にしたい。基礎的な技能の習得や計画を立てると

きに，友だちと互いに教え合い，聞き合うことが意欲を高め，互いに向上させることにつながり，その大切さにも気づくことができると考える。

衣生活の学習で導入の段階でこそ，基礎・基本はもちろん，人とのかかわりを通じて段階的に学習を進めることを通して，家庭での実践意欲を育てていくことが必要であると考え，この題材を設定した。

本題材は，生活に役立つ物の製作について取り組む。形などを工夫し布を用いて物を製作することを通して，布や生活に役立つ物の製作に関心をもち，製作に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身につけるとともに，作る楽しさを実感し，日常生活で活用する能力を育てることをねらいとしている。

第１次では，第２次でのマイネームプレート作りに向けて，製作に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身につけ，定着を図りたい。まず，針と糸になれるために，練習布を用いて，糸通し・玉結び・玉止め，いろいろな縫い方，ボタン付けの練習を繰り返し行う。初めての子や苦手な子は得意な子に聞いたり，得意な子は初めての子や苦手な子に教えたりして，子どもどうしのかかわり合いをもつ中で意欲を持続し，高め合いながら取り組む。また，ただ単に，やり方を覚えていくことにはならないように，玉結び・玉止めができるようになるために練習布にあるいちごの種の完成を目指したり，マイネームプレートに挑戦するためにさまざまな縫い方をマスターしようと意識づけたりして，めあてをもたせることで，そのめあてに向かって子どもたちが意欲的に取り組む手立てとしたい。

第２次では，第１次で身につけた技能をつかって，マイネームプレートに挑戦する。ここでは，基礎・基本のさらなる定着とそれを活用することができるようになりたい。マイネームプレートを作るためには，どのような縫い方をすればよいのかをデザインしながら考える。そのデザインをもとにマイネームプレートを製作する。簡単な製作ではあるが，一つの作品を作ったという達成感や喜びを味わわせたい。さらに，自信へとつなげ，「もっと作りたい」「違うものが作ってみたい」と思わせるようにしたい。

第３次では，マイネームプレートよりグレードアップした小物作りに挑戦する。まずは，小物作りの計画を立てる。生活に役立てるためにどんなものが作りたいかを決め，どうすれば上手に作れるかを手順や必要な用具，でき上がり図などを考える。新聞紙を使って一度試し縫いをさせることにより，自分の製作計画を見通し，自信をもって製作できると考える。自分のイメージを表現させるためのワークシートを用意し，それをもとに一度立てた計画で上手く作れるかどうかを友だちに見てもらい，手順で上手くいかないところやもっとこうしたらよくなるというところをグループの中でお互いに話し合ったり，意見交換をしたりする場を設けた。友だちとのかかわりをもつことで，それまで自分では気づかなかった新たな気づきが得られ，それを自分の作品づくりに活かせるようにさせていきたい。話し合いからもう一度立て直した計画をもとに，製作に取り組む。さらに，ふりかえりで友だちの作品のいいところ，自分の作品の工夫したところをみつけて次どう活かすかを考えることで，家庭での実践へとつなげたい。

２．活動展開計画（全14時間）

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動
1	針と糸の名人になろう	1 〜 6	○糸通し・玉結び・玉止めをする。 ○いろいろな縫い方（名前の縫いとり，なみ縫い，本返し縫い，半返し縫い）をする。 ○ボタン付けをする。
2	マイネームプレートに挑戦しよう	7 ・ 8	○デザインを考える。 ○マイネームプレートを製作する。 ○ふりかえりをする。
3	自分だけの小物作りに挑戦しよう	9 〜 14	○小物作りの計画を立てる。 ○友だちからアドバイスをもらい，計画を立て直す。 ○計画をもとに小物作りをする。 ○友だちの作品のいいところ，自分の作品の工夫したところをみつけて，次どう活かすかを考える。

評価計画

次	時	関心・意欲・態度	創意工夫	技能	知識・理解	家庭科における思考力・判断力・表現力
1	1〜6	いろいろな縫い方に関心をもち，進んで取り組もうとしている。		簡単な縫い方や玉結び・玉止め，ボタン付けができている。	製作に必要な材料や用具がわかり，簡単な縫い方や玉結び・玉止めやボタン付けの仕方がわかる。	
2	7・8	進んでネームプレート作りに取り組もうとしている。	デザインをもとに，必要に応じた縫い方を考えたり，自分なりに工夫したりしている。	目的に応じた簡単な縫い方で製作しようとしている。		デザインをもとに習得した縫い方でネームプレートを表現しようとしている。
3	9	進んで小物作りの計画に取り組もうとしている。	小物作りの計画を自分なりに工夫している。	布を用いて製作する物の計画を立てることができる。		
	10・11	友だちにアドバイスしたり，聞こうとしたりしている。	友だちからのアドバイスをもとに，より工夫を加えて計画を立てている。		自分が作ろうとする小物の手順がわかる。	友だちからのアドバイスをもとに，計画し，ワークシートに言葉や絵で表している。
	12・13	進んで小物作りに取り組もうとしている。		目的に応じた簡単な縫い方で製作しようとしている。		計画をもとに，小物を製作している。
	14	製作する楽しさや完成した喜びを味わい，活用しようとしている。				友だちの作品のよいところ，自分の作品の工夫したところから，生活に活かせるところをみつけている。

3．授業の実際

(1) 活用するための習得

- 最初はむずかしかったけど，１こできたらいっぱいできました。またやってみたいです。（A児）
- 玉結びのことは最初知らなかったのであせっていたけど，班の人たちが教えてくれたのでうまくできました。よかったです。（B児）

これは，第１時での初めて玉結びをした授業後に書いたふりかえりである。

第１次では，手縫いの基礎的・基本的な技能を身につけることをねらいとし，導入として針と糸になれるための活動に取り組んだ。子どもたちは，裁縫道具を初めて使うということで，とても意欲的であった。子どもたちに一方的に教え込むことがないように，必要性について考えたり友だちどうしで教え合ったりすることを通して，製作の喜びを味わいながら基礎的・基本的な技能を身につけることができたこ

とが上記のふりかえりからうかがえる。

また，苦手意識のある子どもは，途中で意欲が低下してしまう可能性があるため，一人ひとりの実態に応じて段階的に楽しく学習できるように，一つ技能が習得できると合格サインがもらえ，すべて習得できるとネームプレートに挑戦できるという条件をつくって取り組んだ。そうすると，早くネームプレートが作りたいと積極的に取り組んでいる姿が見られ，意欲を持続させながら学習を進めることができたと考える。ネームプレート完成後の子どものふりかえりの中から一部を紹介する。

- ネームプレートでは，いままで習ったわざをよりたくさんうまく使えたのでよかったです。そしてこれからも使っていきたいと思います。（C児）
- 今までネームプレートを作る練習をしてきて，最初はあまり自信がなくて不安だったけれど，だんだん出来なかったことがかん単に出来るようになっていってとてもうれしかったです。もっと練習してもっとうまくなるようにがんばりたいです。（D児）

これらのふりかえりから，基礎的・基本的な技能を身につけることで，活用してできたネームプレートに満足感を感じたり，できるようになった自分に自信をもったりすることができた。さらに，次の学習への意欲とつながったことがわかる。

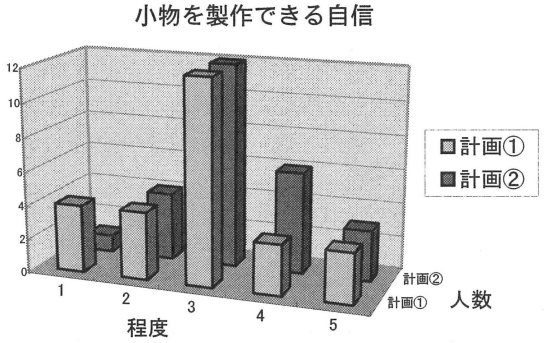
(2) 習得したことを活用する場面における思考力・判断力・表現力の育成

ここでは，思考力・判断力・表現力の育成にかかわる第３次について，アンケートと子どもの変容をもとに述べていく。

第３次は，今まで習得してきたことを活用して，自分の生活に役立つ物について考え，作りたい小物の製作に取り組んだ。第２次では，マイネームプレートを製作しているので，マイネームプレートよりグレードアップさせること，上手に作る方法を考えながら製作することを大きなめあてとし，ネームプレートよりもさらによいものをどうすれば上手に作ることができるのかを自分たちで考え，作品に表現していくことを意識づけた。それは，目的にあった縫い方を考えたり，形などを工夫しながら見通しをもって製作計画を立てたりすることで思考力を，製作の手順や必要な用具，工夫を考え，イメージを絵や言葉を使って表現力の育成を図りたいと考えたからである。

また，一人ひとり作りたいものが違うので，個別の活動になるが，計画を立てた段階で，自分だけでなく，友だちとその計画で上手に作れるかどうかを一緒に考えながらアドバイスをもらったりいいところをみつけたりする活動を取り入れ，もう一度計画を立て直した。これは，友だちとのかかわり合いを通して，１回目よりも２回目となるように，さらに製作計画を練って考え，完璧に近づくように思考し，表現する力がつくと考えたからである。

①アンケートによる分析



「あなたは自分が作りたいと思っているものを作れる自信がどのくらいありますか」という項目に対して，１回目の計画の後と２回目の計画の後では，グラフのような結果となった。（程度の数字が大きいほど自信がある）１回目より２回目の方が１と答えている子どもが減り，４と答えている子どもが増えたことがわかる。これは，友だちからもらったアドバイス（P.149）により，計画がより確実なものとなり，友だちとのかかわり合いが，上手に作れる自信へとつながったと予想できる。

②ワークシートによる分析

計画のワークシートを比べてみると，効果的な変化があった。E児の変容から見ていくこととする。

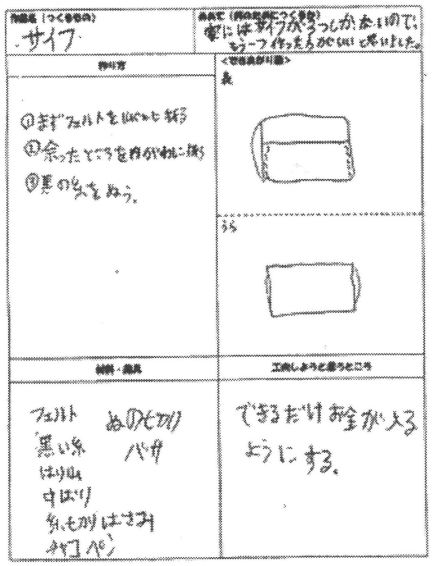


図1．1回目の計画

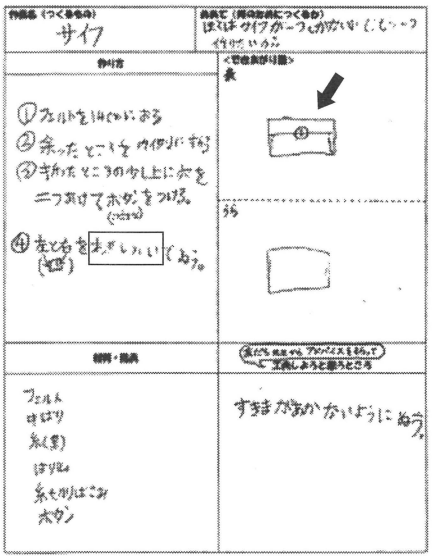


図2．2回目の計画

左側のワークシートが，E児の1回目に考えた小物作りの計画である。E児は，それまでに学んできたことを活用した作品の計画を立てている。ここでは，まず自分の作りたい物をイメージして，それを言葉や絵に表現した。E児の計画では，この手順でいくと上手に作れると考えている。しかし，このままだと財布の口を止めるものがないとお金が出てしまうだろうと予想される。

そこで，新聞紙で試作をしてみる。右側にある写真がそのときの様子である。このとき，説明を聞きながらグループで共同試作をする。友だちに説明する機会を設け，自分の考えた計画を言葉に表現するようにした。また，計画の段階では，頭の中でのイメージなので実際に説明しながら作ってみることで気づくことも出てくる。グループの中で一緒にE児の計画について考えることで，この手順でやっていくと作れなくなるなどのつまずきを指摘してもらったり，もっとこうすると友だちの作品は良くなるなどのアドバイスをもらったりした。

E児の計画に対する友だちからのアドバイスは，以下の2つであった。

- 手順③の黒い糸（図1．1回目の計画より）は裏もぬい目がきれいで，すきまがあかないように本返しぬいをするといいと思う。
- ボタンはつけた方がいいと思う。

上図の右側が，E児の2回目の計画である。1回目と変わったところは，縫い方が本返し縫いになったこと（図2の□），財布の口のところにボタンを付けたこと（図2の↓）である。グループの中からアドバイスをもらったことで，このままでは財布の両端にすきまができ，口からお金が出てしまうということに気づいた。その課題をどうすればいいかということやさらに工夫するといいところを思考しながら，それを計画のワークシートに表現していった。1回目の計画より2回目の方がより具体的になり課題を解決できたことがわかる。このような姿が見られたことは，かかわり合いが大きく影響していると考える。自分の考えでは気づかなかったことを友だちのアドバイスにより気づくことができ，考え表現することにつながったのでよりよいものに近づいたと感じられた。

E児だけでなく，考え直して手順が加わったところや入れ替わるところがあったり，友だちどうしのかかわりにより製作の手順など見通しをもって考えたりする子どもや，でき上がり図もより詳しくなったり，自分で作りたい物を絵や作品に表したりする子どもも見られた。思考する力や表現する力の育成につながると考える。

- 計画をきちんとかいてから作るのにとりくむのは初めてだったけれど家でやっていたより計画をかいていたことで上手くできました。夏休みも計画をして取り組みたいと思います。（F児）
- けっこううまくじょうぶにつくることができたと思いました。もっとかっこよくしてみたいと思いました。ぼうしやふくやいろいろつくりたいな～と思いました。（G児）

これらは，作品を製作したあとの子どものふりかえりである。このふりかえりから，計画を立てて見通しをもつことの大切さや「またやってみたい」「もっとこうしたい」という次への意欲につながったことがわかる。さらに，上手くいかなかったところに対しても，そこで終わりにせず，次どうするかを考えることによって生活に返していくことができると考える。

4．成果と課題

(1) 成果

自分がイメージした作りたいものをどういう手順であれば上手に作れるのか，どのような用具を使えば作れるのかなどと考えたことは，目的に合った縫い方を考えたり，形などを工夫しながら見通しをもって製作計画を立てたりするという思考力の育成につながった。また，その考えたことを絵や言葉を使ってワークシートに書いたり作品に表現したりしたことは，表現力の育成につながったと思われる。これをさらに段階を追って，発展させながら中学校3年生までへとどのようにつないでいくかが，生活をよりよくしようとする能力と態度を育成するために大事になってくる。

また，1回目と2回目の計画の間にグループでアドバイスし合う場を設定したことは，E児の変容だけでなく，他の子どもからも工夫が加わったり手順が変更していったりしていた姿が見られたことから，成果があったと言える。互いにアドバイスをし合うというかかわり合いによって，一人ひとりが計画について考え，作品に表現できるようになることが見えてきた。一人ひとり製作するものが違うことから一人で考え作る活動になりがちではあるが，この場を設定したことで，友だちとのかかわりがもて，その中で思考力，表現力を育成することができたと考える。

(2) 課題

この実践をしてみて，かかわり合いをいつ設定するかによって深まり方が違ってくると感じた。実際に作ってみる前と作ってみた後（もしくは作っている途中）のどちらにかかわり合いを設定するかが大事になってくるのではないだろうか。なぜなら，家庭科が初めてである5年生という発達段階において，経験の差によってアドバイスも変わってくるからである。ほとんどの子どもが計画を立てて物を製作した経験がないため，自分でも何をアドバイスしていいかわからないという実態から，子どもたちが考えた計画で上手くいくかどうかは実際に作ってみないと分からず，どこでかかわり合いの場をもつかが大切である。体験をした後のかかわりによって，より深まりのある思考力を得られるのではないだろうか。

また，どのように他者とかかわって思考力，表現力を身につけるかが課題となる。少しでもグループでのかかわり合いが実りあるものとなるように，一度立てた計画を一人取り上げ，みんなで考えてからグループでの活動の場面を設定すれば，どういうところをアドバイスしたらよいかという視点がもてて，より深まりのあるかかわり合いの場となったのではないかと考える。

以上のことから，活動展開計画を工夫する必要があると感じた。それは，子どもの学びをつなぐためにこれまで習得してきた基礎的・基本的な知識及び技能を活用する場で，どのようにかかわり合いをもって思考力・判断力・表現力を育成していくか指導のあり方について検討していくことが必要となる。

（文責　村松麻衣子）